大阪市立大学大学院　都市系専攻
修士論文概要集 2016 年 2 月

堺の歴史的変遷から見る都市空間形成についての研究

STUDY ON URBAN SPACE FORMATION IN HISTORICAL TRANSITION OF SAKAI

建築デザイン分野　亀井　健太
Architectural Design　Kenta KAMEI

大阪府堺市は歴史的・文化的価値を各時代に感じることの出来る都市である。一方、近代は深く語られておらず時代を連続でとらえることが出来ない。本論文では明治以降の堺の工業化に焦点を当て、工場立地の変遷を追うことによって新たな都市像を模索し時代を繋げた。そして、環濠内の紀州街道を軸とする商業の中心が工業化によって東側に動かされることによって都市が拡大し、明治以前にあった環濠都市と近郊農村の明瞭な関係性が和らいで行く様を明らかにした。

Sakai, Osaka is a city that can feel a historical and cultural value in each era. On the other hand, it can't be considered the era continuously because modern has not been told deeply. In this paper, we focus on the Sakai of industrialization after the Meiji era and I was connecting the era to explore a new city image by following the evolution of the location of the factory. As a result, Center of commerce that has been established by the axes of the Kishu Road in the moat will expand the city by being moved to the east side by industrialization, and it revealed that a clear relationship of the moat urban and rural suburbs before Meiji era was not powerful.

1. 研究の目的と背景

大阪府堺市には 5 世紀頃に造られた仁徳天皇陵をはじめとする多数の百舌鳥古墳群が残されている。戦国時代には貿易港として黄金期を迎え、対明貿易や南蛮貿易によって海外との交流拠点として発展してきた。会合衆と呼ばれる大商人によって環濠都市が築かれ自治都市として繁栄してきた。江戸時代には堺奉行が置かれ、幕府の直轄地となった。明治元年には堺県が置かれ､明治 22 年に市制が施行され堺市として独立した都市として歩みを進める。その後、近代工業の発展、市域の拡大、交通の発達などによって近代化が進み都市が拡大し、人工的、面積的にみて大阪府の第二の都市として発達してきた。しかし、第二次世界大戦による空襲によって中心市街地が壊滅的な状態になったが高度経済成長期に堺泉北臨海工業地帯や泉北ニュータウンが開発され再び大きく発展した｡平成 18 年には政令指定都市として認定されるまで成長した。このように堺は各時代で繁栄と衰退を繰り返してきた歴史的、文化的に特徴のある都市として捉えることが出来よう。

昨今、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録事業や堺環濠都市遺跡の発掘調査などによって古代の古墳群や中世の環濠都市には注目が集まっている。また、既往研究の堺らしさの言及として、元和元年に近世の環濠都市として碁盤目の町割りが登場したことや第二次世界大戦後の復興計画が現代の都市の形成に多くの影響を与えていることは語られて来た。一方、堺に市制が施行された明治後期から始まる近代化に関しては多くのことが語られてこなかったために時代の連続性を感じることが出来ない。

都市空間は都市計画等によって建築物が連続して形成する市街地として捉えられることが多い。しかし、意識的、経済的、慣習的、物流的、行動的など、それ以外の要素も含めて総合的に捉えられるべきものではないだろうか。それらが複雑に絡み合うことによって同じ地形であっても空間の捉え方が変化すると思われる。

堺は近代になって市街地が拡大したが、古代の古墳群や中世の環濠都市のように都市を大きく書き換えるような変化をしたわけではない。そのため、市街地の拡大として都市を捉えるだけでなくそれ以外の要素も含めて考えることが適した方法であろう。本研究では堺が近代以前は商都として、近代以降は工業化することによって発展してきたことを考慮して、商業と工場の 2 点に着目した。また、工場を単に数字上の増減として捉えるのではなく工場を地図にプロットした面として捉えることによって、町の移り変わりを視覚的に表現して堺の抜け落ちた時代である明治後期から戦後を繋げ、新たな堺の都市像を浮かび上がらせたい。

2. 研究の方法

堺の都市が明治以降の工業化によってどのように変化して来たのかを視覚的に明らかにするために、各時代の工場の分布図を作成した。この分布図をベースマップとして都市空間の形成を考察していった。

2.1 工場分布図の作成の史料

工場分布図を作成するために『工場通覧』、『堺市全図』、『堺市勢要覧』を利用した。

①『工場通覧』: 日本で最初に工場の一覧表が発行されたのが明治 25 年の農商務省商工局編集『工場通覧[1]』であった。各都道府県の職工数 10 名以上の各業種の工場について一覧になっている。工場の名称・製品種類[2]・所在地・工場主名・創業者・職工数（男・女）・原動力が記載されている。

②『堺市全図』: 堺市の工場の立地がわかる地図として国土地理院発行の『地形図 1/25000』があるが、工場の名称までは記載されていないため、『堺市全図』を利用した。

③『堺市勢要覧』: 堺市の各種統計が記載されており、その中で諸工場の項目に堺市における工場の名称・所在地・製品・職工数（10 名以上[3]）が記載されている。

以上の史料によって工場分布図を作成した。工場の立地の変遷を横断的に研究するために時代を網羅している『工場通覧』をベースとして補助的に『堺市全図』と『堺市勢要覧』を使用した。

2.2 地域の分割

堺は中世の大商人によって形成された環濠都市と江戸時代の新田開発によって大きく発展した近郊農村では都市の発展に明瞭な違いが見られる。明治 42 年国土地理院発行の 2 万分の一の地形図を確認すると、環濠都市と小さな集落が点在している近郊農村の構成になっていた。また、明治 22 年の 4 月 1 日に堺に市制が施行される以前、環濠都市は堺市、近郊農村は大鳥郡、八上郡、丹南郡に行政区が異なっていた。そこで、近代以降の都市空間を考えるために「旧堺市[4]」と「近郊農村」を対比的に捉えるために 2 つに分割して考えて行くことにした。

2.3 時代区分

堺の近代以降の工業化の歴史的変遷を考えるにあたり時代の差異の期間の選定は大事だと考えた。そこで、「日本の工業化段階と都市形成（上）」太田勇を参考に明治 37 年、大正 7 年、昭和 24 年、昭和 45 年に分類した。これに加えて堺市は昭和 9 年の室戸台風による影響が大きかったために昭和 9 年と昭和 12 年も加えた。

3.堺の近郊農村の工業化

『工場通覧』からピックアップした工場の所在地から堺の近郊農村における各年代の工場分布図を作成し、工場立地の移り変わりから明治後期以降の堺の近郊農村における工業化の移り変わりを考えて行く。

3.1 堺の近郊農村における工業化のきざし

市制が施行された明治 22 年の堺の近郊農村では農業が盛んで、商業的農業として綿花栽培が展開していた。各村の集落は農村集落を形成していた。当時の堺の近郊農村における工業として言えるものは大鳥郡の菜種油、綿油の製油業の 1000 石程でほとんど存在していなかった。明治後期になって堺の中心部から堺緞通製造業の農村部への拡散が始まり、百舌鳥村、深井村に拡大してきた。その後、第一次世界大戦による好景気によって土地の価格が安く、労働者が豊富にある堺の近郊農村で工業が飛躍的に発展することになった。各業種の工場も次々に建設されて行った。

3.2 堺の近郊農村の工場数の変化

表 1 は堺の近郊農村の各時代の工場数の増減を表したものである。工場数の増加が多いところは工業化された村として考えることにした（表 1 の茶色）。この表から各村がどの時代に工業化したのかを理解することが出来る。また、戦前に工業化したが第二次世界大戦の影響によって工場数を減少させ、高度経済成長によって二度目の工業化をした村もあった（表 1 の赤色）。

表 1　堺の近郊農村の各時代の工場数

堺市の近郊農村の工場数	明治37年	大正7年	昭和9年	昭和12年	昭和24年	昭和45年
堺市	87	135	184	263	74	112
向井村	3	12	81	171	133	190
三宝村	0	1	32	54	46	82
湊町	3	4	15	24	31	42
触松村	1	2	4	4	32	48
浜寺町	0	2	5	17	3	0
浜寺下石津	0	2	13	17	25	32
船尾	0	2	1	0	3	15
神石村	0	8	19	16	12	46
鳳村	1	5	5	7	12	22
八田荘村	0	4	20	26	6	eu
深井村	1	0	7	13	27	44
東百舌鳥村	3	4	8	7	6	32
百舌鳥村	0	4	8	7	6	32
金岡村	0	0	1	2	21	34
五箇荘村	0	2	1	3	3	5
北八下村	0	0	6	8	11	8
南八下村	0	1	1	2	4	10
曰置荘村	0	0	1	1	15	26
野田村	0	0	4	5	11	6
大草村	2	0	6	13	14	17
鶴田村	1	17	18	11	0	33
北上神村	0	2	10	0	0	4
美木多村	0	3	8	5	0	4
上神谷村	0	6	5	2	1	5
東陶器村	0	4	16	16	4	27
西陶器村	0	0	1	7	0	2
久世村	0	4	13	12	3	16

3.3 堺の近郊農村の工業化の成立と展開について

堺の近郊農村の各時代の工場分布図を作成し。表 1 の各村の工場数の変化から増減率を読み取り、業種の変化から堺の近郊農村でどのように工業化が始まり、広がって行ったのかについて考えた（図 1 参照）。

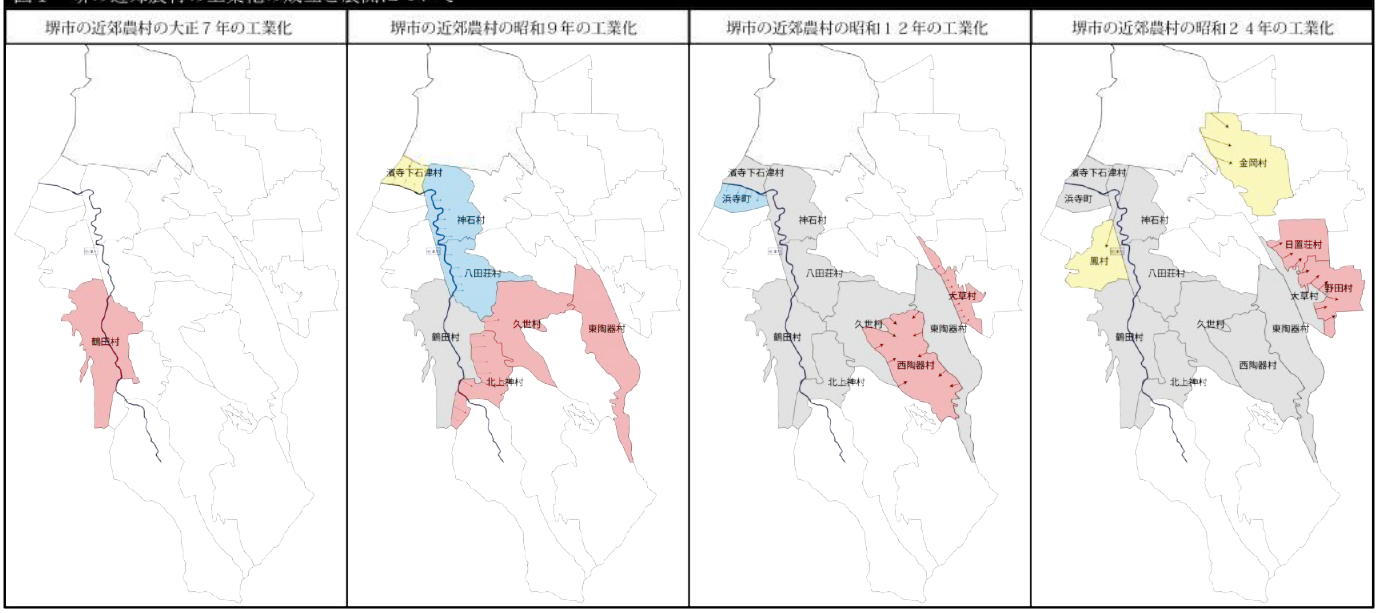
(1) 明治 37 年の堺の近郊農村の工業化

この時代の堺の近郊農村は職工数が 50 名以下の紡績業、綿織物業、緞通業の工場が点々と分布しているだけで工業化した村は無かったと考えられる。

(2) 大正 7 年の堺の近郊農村の工業化

明治時代から大正時代にかけて、南西部に位置する鶴田村が白木綿業の工場の増加によって周辺の村と比

図１　堺の近郊農村の工業化の成立と展開について



べれば大きく工業化したと言える。第一次世界大戦の好景気で泉大津市で織物業の工業団地が形成されたことが影響していたと思われる。しかし、鶴田村には職工数が 50 名以上の工場は立地していないために中小の工場が集積した村であったと考えられる。

(3) 昭和 9 年の堺の近郊農村の工業化

大正時代から昭和 9 年にかけて、全ての村で工場が建設され工業化の波が堺の近郊農村に来ていることがわかった。神石村と八田荘村は染物産業の工場が広がり、久世村と北上神村は大正時代に工業化した鶴田村の影響を受けて織物産業の工場が増加することによって工業化したと考えられる。

(4) 昭和 12 年の堺の近郊農村の工業化

昭和１２年にかけて浜寺町の染物産業の工場が増加した。大草村と西陶器村は隣接した東陶器村が昭和初期に工業化した影響によって織物産業の工場が増加し工業化したと考えられる。

(5) 昭和 24 年の堺の近郊農村の工業化

昭和 24 年にかけて東陶器村を一帯としていた織物産業の工場地帯が工場の減少によって衰退した。しかし、日置荘村と野田村で織物産業の工場が増加したため工場地帯が東側に広がっていった。一方、北東部の金岡村と南西部の鳳村は金属、機械工場の増加によって新たに工業化した。また、南西部の浜寺下石津村と神石村に職工数が 500 名以上の巨大工場が進出してくるようになった。昭和初期に府道遠里小野線が鳳村まで開通した影響と考えられる。

以上のように堺市の近郊農村では、明治後期から昭和初期まで石津川沿いの晒産業と織物産業を中心とした伝統産業によって各村が工業化し周辺農村に拡大して行った。しかし、府道遠里小野線の開通と戦後の金属・機械工業の工場の進出によってその構造が崩れて行った。

4.旧堺市の近代化による都市空間の変化

『工場通覧』からピックアップした工場を地図上にプロットした工場分布図に堺の商業の史料から得られた各時代の商業の状況を重ね合わせた。そして、工場によって拡大した市街地によってどのように旧堺市の商業の中心が変化したのかについて明らかにした。

(1) 明治 37 年の旧堺市の都市空間の変化

明治 37 年の工場分布図に『大阪府統計書』明治 31 年に記載されている市場と『全日本商工人名録』明治 37 年に記載されている商店をプロットした（図 2)。

明治 37 年の旧堺市は江戸時代の元和の町割りのときに紀州街道沿いに商人が集められたことによって形成された商店街と工場が環濠内で混ざりながら立地していることがわかった。呉服太物商業と酒類食料品業の商店が紀州街道沿いと山之口筋に立地していることから商業の中心は環濠内の中心部であったと思われる。

(2) 大正 7 年の旧堺市の都市空間の変化

大正 7 年の工場分布図に『堺市勢要覧』大正 14 年に記載されている市場と『全国商工人名録』大正 7 年に記載されている商店をプロットした（図 3)。

大正7年は明治37年に続き紀州街道沿いに南北に商業が広がっていた。しかし、その範囲を南北に拡大しているのがわかった。商業地域の北部の拡大は七道町に大日本セルロイドの巨大工場が建設されたことによって拡大したのではないだろうか。

(3) 昭和 9 年の旧堺市の都市空間の変化（図 4)

昭和初期の旧堺市は昭和 5 年に大和川に遠里小野橋が架橋され、府道遠里小野線が開通したことと昭和 6 年に幅員 27 メートルの国道 16 号線が三宝村と湊村間に開通されたことによって大阪との結びつきが強くなり、堺市の工業化が一気に加速した時代である。また、

大正 7 年から昭和 9 年にかけて市之町四丁に立地していた福助足袋工場が中安井町に工場を移転するとともに、他の企業も環濠周辺部の湊町、戎島町、七道町に巨大工場を建設して行った。向井村は自転車部品業を中心とした職工数の少ない工場が拡大することによって北部に工場地域を広げていた。

(4) 昭和 12 年の旧堺市の都市空間の変化（図 6）

昭和 9 年から昭和 12 年にかけて、環濠内では小さい規模の工場が増加した。一方、職工数の多い工場も三宝村と耳原町に拡大しているのがわかった。三宝村は昭和 9 年に室戸台風によって壊滅的な被害を受けたが徐々に復興してきていることがわかった。また、向井村では北部の遠里小野町と南庄町に自転車産業の工場を中心に市域を拡大していた。

■昭和 12 年の旧堺市の商業

昭和 12 年の旧堺市の商業として市場と商店が考えられよう。当時の商業の状況を明らかにするために市場が記載されている『堺市勢要覧』昭和 3 年～昭和 13 年と商店が記載されている『堺市商工人名録』昭和 12 年から商店数を丁別に分類した商店分布図を作成した（図５）。

昭和 12 年の旧堺市の市場は蔬菜市場 2 カ所、乾塩魚市場 1 カ所、食料品・日用品市場 17 カ所、小鳥類市場 9 カ所の合計 19 カ所、商店は 2165 店であった。環濠内の商店は熊野町、市之町、甲斐町、大町、宿院町、中之町の東側に多く位置しており、特に大正時代から続く山之口筋商店街には多く商店が建ち並んでいた。また、山之口筋商店街から東側に伸びた宿院町商店街、

図２　明治３７年の旧堺市の状況

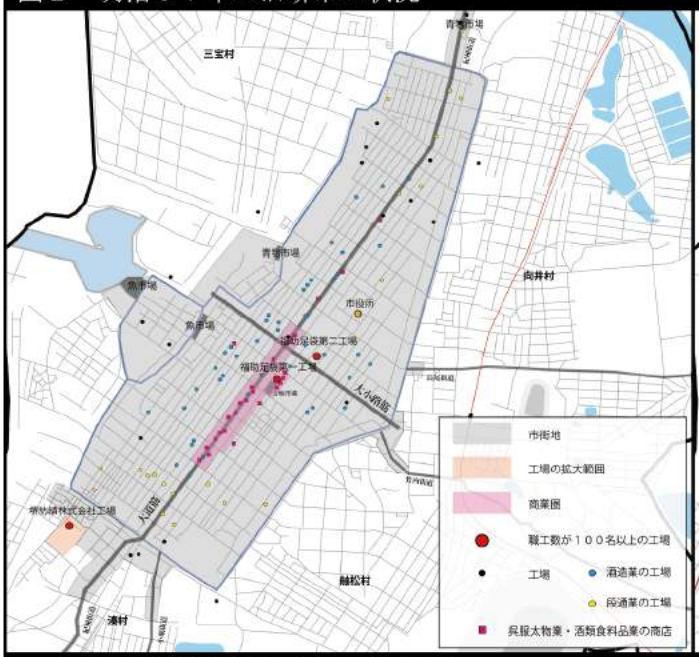


図３　大正７年の旧堺市の状況

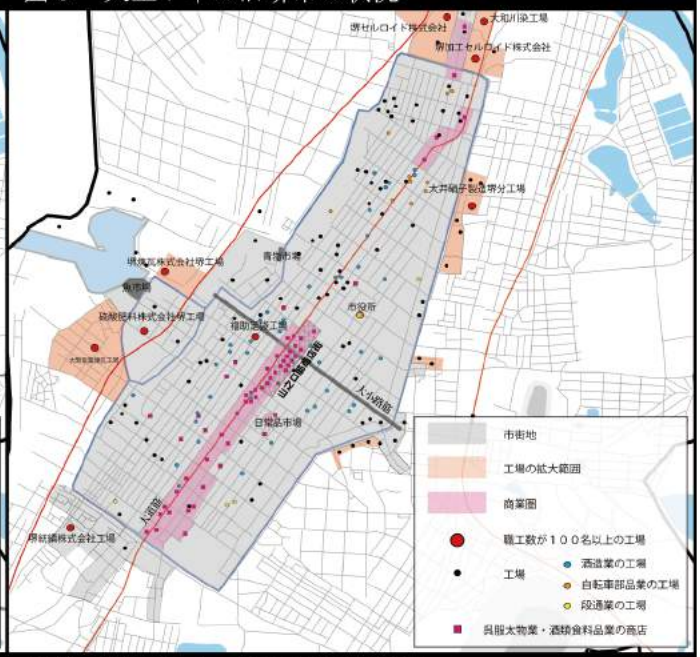


図４　昭和９年の旧堺市の工場分布図

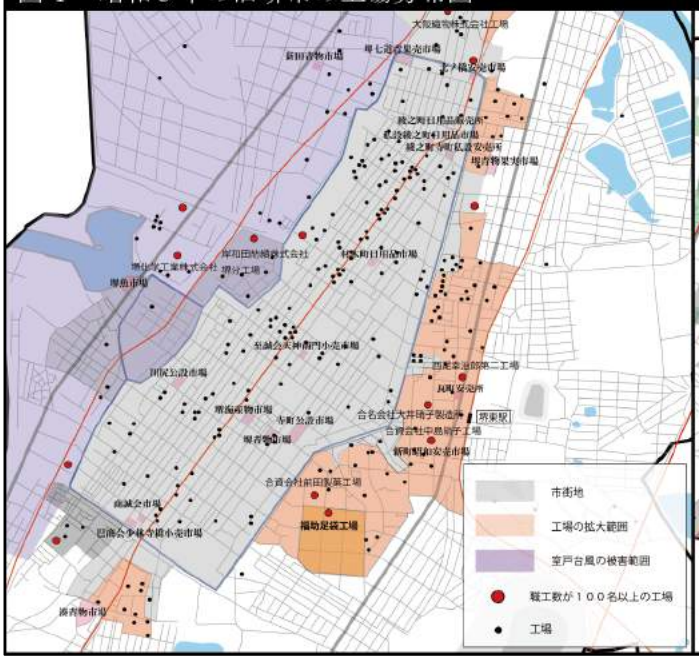
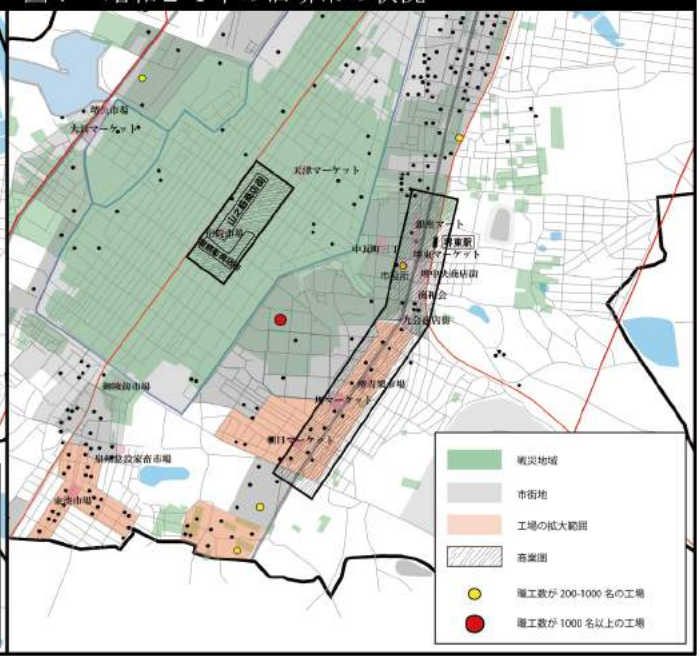


図７　昭和２４年の旧堺市の状況



川端筋商店街、目川筋商店街にも商店が多かった。一方、環濠外の商店数を確認してみると、中安井町と瓦町の商店数が他の地区よりも多いのがわかる。中安井町と瓦町にも商店街が形成されていたことになろう。

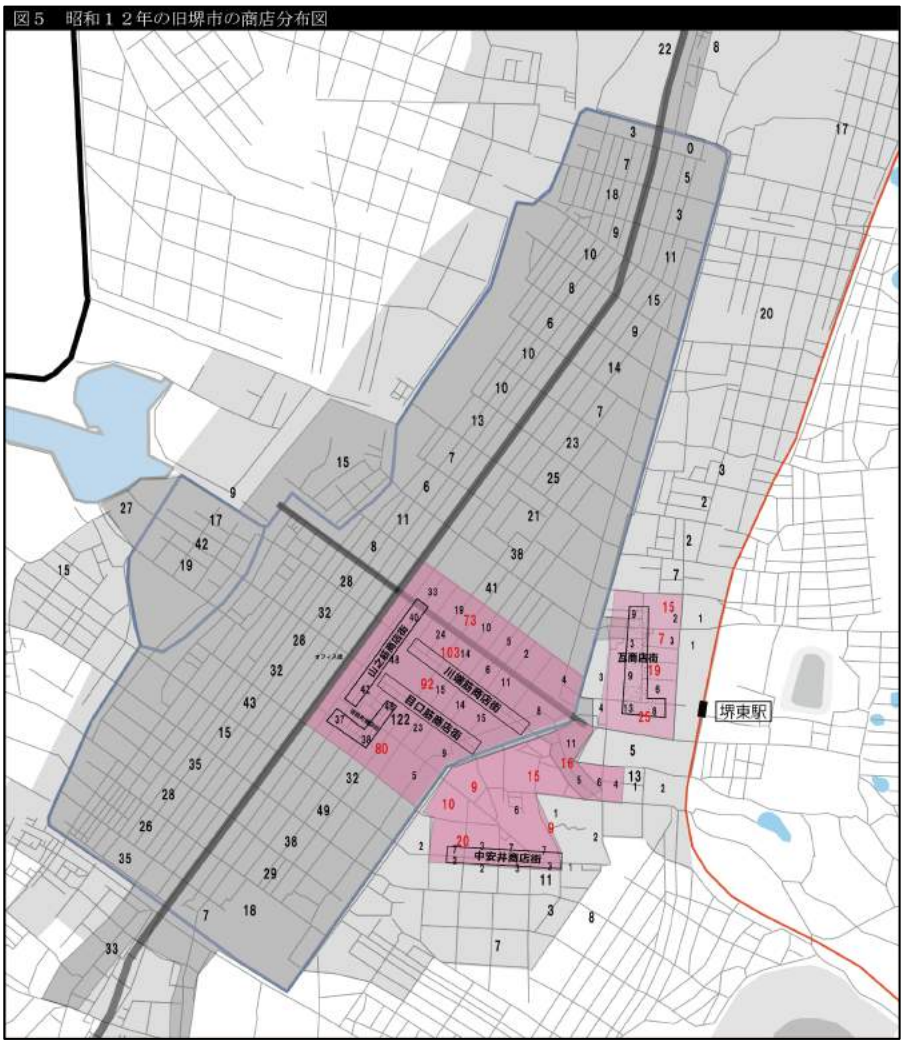
(5) 昭和 24 年の旧堺市の都市空間の変化

昭和 24 年の工場分布図に『堺市勢要覧』昭和 27 年に記載されている昭和 24 年の市場とマーケット及び商店街をプロットした（図 7)。

昭和 24 年の堺市は第二次世界大戦の空襲によって中心部が焼失してしまった影響で、戦前にあった南海高野線の堺東駅前の工場群も無くなってしまった。昭和初期には環濠内から堺東駅前に一体感のあった商業地域が山之口筋商店街と堺東駅前から一條通りの商店街に二極化しながら戦災復興をして行ったことがわかった。

以上より、旧堺市では環濠周辺部に工場を拡大することによって都市を広げていることがわかった。その中で、昭和初期の工業化を頂点にして大きく都市が変化して行った。大正 7 年に福助足袋の工場が環濠外の中安井町に進出してくるのが始まりとして、昭和 6 年の府道遠里小野線の開通によってインフラ整備が整い工場が環濠外に進出してくるようになった。また、昭和 9 年の室戸台風の災害によって海岸線に工場立地することが出来ない影響は内陸部の環濠外東側に工場が進出するのを助長した。環濠内の紀州街道の大道筋を中心軸として成立してきた堺の都市が大きく東側に重心を変えたきっかけとなった。その結果、大正時代まで商業の中心地であった山之口筋商店街も東側に引き寄せられるように拡大し、南海高野線の堺東駅前まで一帯となって商業地を形成するようになった。工業化によって都市が変化したと言っていいのではないだろうか。

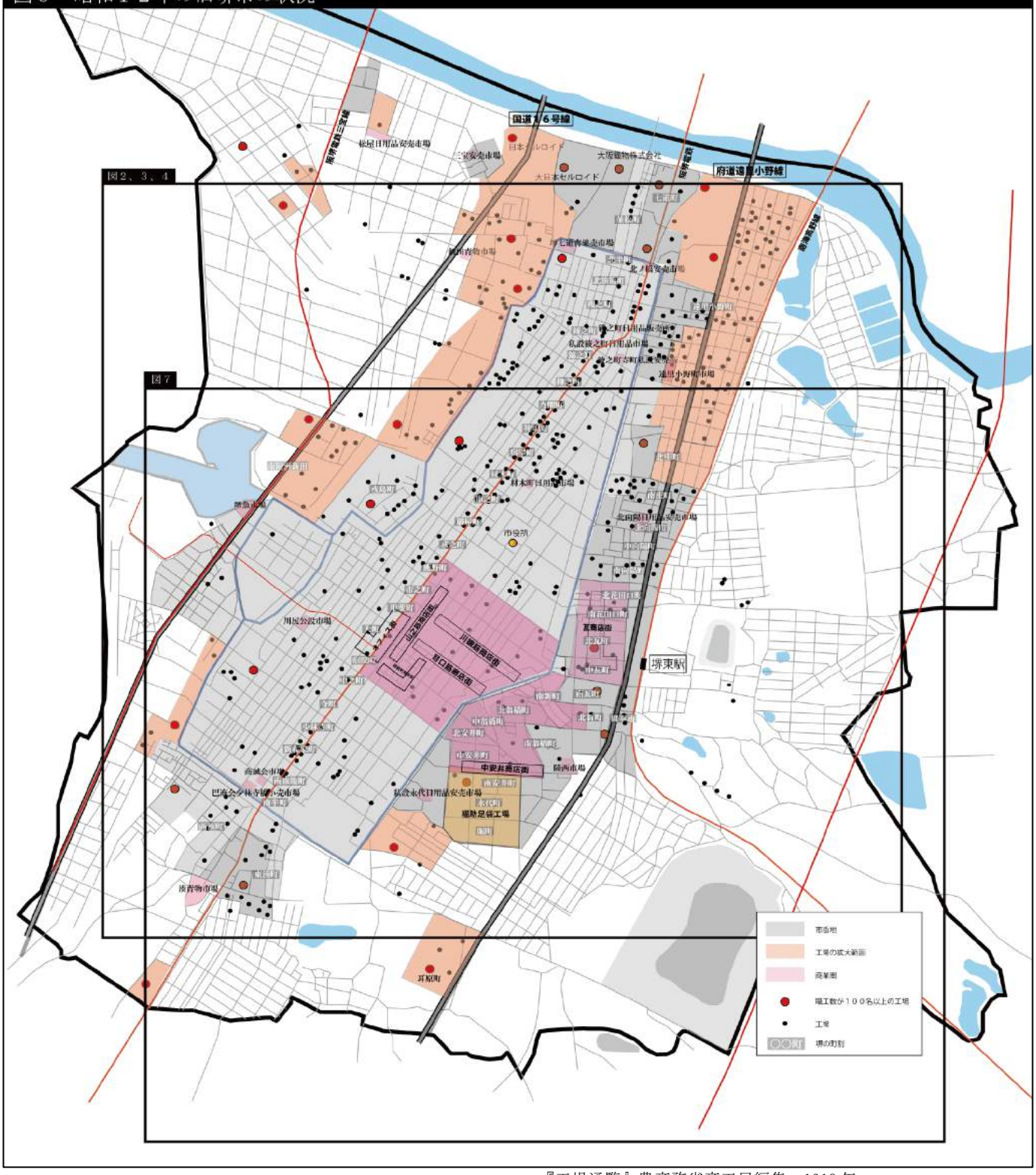
図５　昭和１２年の旧堺市の商店分布図



5.結論

堺は現代の都市の姿を見るだけで近代における都市の発展を理解することは困難であった。しかし、本研究で近代における商業と工場の状況を分布図で作成し、都市空間を見つめ直すことによって近代と言う時代が単に工場を立地することによって都市を拡大していたのではないことがわかった。元和の町割りによって形成された碁盤目状の環濠都市が昭和初期に府道遠里小野線の新たな軸が引かれることによって、大阪との結びつきが強くなり、歪まされて行ったのである。旧堺市では紀州街道の大道筋を中心軸として形成されていた商業の中心部が工業化によって東側に重心を動かすことによって環濠都市の骨格を残しながら都市を拡大した。また、府道が鳳村まで引かれたため、伝統産業によって工業化をしてきた近郊農村が都市との結びつきを強くしていった。近世の堺の骨格をひと周り大きくした近代の堺が姿を表したのである。このような発展をしたにも関わらず、近代という時代が抜け落ちて捉えられてきたのは堺と大阪との距離が意識的に縮まったことによって都市が発展したことが明らかになっていなかったからではないだろうか。また、堺の歴史を振り返ると近代以前は自治都市として、現代は政令指定都市として自力で成長してきた都市として捉えることができよう。しかし、近代と言う時代は大阪の枠組みの中に組み込まれ影響を受けながら発展してきたのである。これは、堺の歴史の中で特徴的な時代として位置づけることができるのではないだろうか。これからは近代工業の絶頂期であった大正時代から昭和初期の都市空間形成の歴史的事実を無しにして堺を語ることは出来ないであろう。

図６　昭和１２年の旧堺市の状況



■参考文献
『福助足袋の六十年』福助足袋株式会社 1942 年
『大和川染工所七十年小史』大和川染工所　1966 年
『大日本セルロイド株式会社史』大日本セルロイド　1952 年
『堺商工会議所百年史』堺商工会議所　1982 年
『堺商工会議所八十年略史』堺商工名鑑編集委員会編　1959 年
『堺市勢要覧』堺市役所　1925 年 1926 年
『堺市制百年史』山中永之佑　1996 年
『堺市史続編』堺市役所　1971 年
『堺の歴史―都市自治の源流』朝尾　直弘　1999 年
「明治期綿織物産地の製品流通とその担い手について-大阪府泉北郡の場合-」中島茂
■工場分布図作成史料
『工場通覧』農商務省商工局編集　1904 年
『工場通覧』農商務省商工局編集　1918 年
『全国工場通覧』商工省発行　1934 年
『全国工場通覧』商工省発行　1937 年
『全国工場通覧』商工省発行　1949 年
『全国工場通覧』商工省発行　1970 年

[1]昭和 9 年以降、『全国工場通覧』の名称が変更
[2]『工場通覧』では各年代で分類法が異なるため、経済産業省『日本標準産業分類』昭和 47 年を参考にしながら、昭和 24 年の中分類を昭和 47 年の大分類に変換して考察している。
[3]昭和 12 年の『堺市勢要覧』からは職工数が 30 名以上の工場が記載されている。
[4]地区割りを把握するために、昭和 11 年発行の『大阪府堺市土地寶典』を参考にしながら、番地の範囲を確定した。

討議

討議［　横山教授　］

いくつか質問があります。都市形成史において、なぜ堺を取り上げるのか。堺を取り上げるとどのような面白さが見えてくるのか。堺自体の面白さでは無く、都市形成史のなかでの堺の面白さ。もうひとつは、結構、細かいデータでプロットなどをしていると思うんですけど、それらの分布が結局マクロな見方で､｢もともとここのエリアにあった工場がこっちに移動しました｡｣って言う、大きい見方だけの話になっている。もっと社会史レベルぐらい、そしてミクロに見れば良かったのではないか｡そうすると、工場が移転することによって、どういう風に工場の周りに街が出来て行くのか、そういう特性はどこにあるのかって言う辺りが見えてくると思ったのですが、その点について論文には書いていないけれど、あなた自信の発見があったなら教えて下さい。

回答

都市形成史に関しては、堺には過去のものと現代あるものに大きな違いがあるのではないのかと思いながらしていました。そして、もう一つの質問は、堺の工場が広がって都市が広がって行くのは、福助足袋が広がって・・・。

討議［　横山教授　］

それは論文に書いてあるからわかる話で、そういった分析で、要するに工場の重心がこっちに行ったというような、そういった話になっていて、工場の進出によって街がどのように変化したのか、工場分布のどういった関係で街が出来て行ったのかについて、もう少しミクロな視点が必要なのではないだろうか、都市を見ていく上でそれについてどういった発見があったのか。

回答

そのような関係性は社史で見ていこうとしたのですが、出来ていないのが現状です。

討議［　横山教授　］

そうですか。せっかくこうやってプロットして相当精密にやったと思うのですが、それで終わってしまっているのは非常にもったいない｡やらなくても、だいたい想像がつくような話だと思います。

討議［　佐久間講師　］

研究の枠組みの外かもしれないんですけど、研究が堺の空洞化していくプロセスにも聞こえました。ある中心性を持ったものが、外に広がって行くような。今、環濠集落の跡は空洞化になってしまい、色んな人がその問題に取り組んでいると思うんですけど、あそこはこれからどのようにすればいいのか研究の中から見えてきたことでメッセージなどがあれば教えて頂きたい。

回答

環濠内は明治時代から大正時代まで、商業と工業で栄えていた。そこの時代と言うものを浮かび上がらせることが大事ではないでしょうか。

討議［　佐久間講師　］

個人的になんですけど、工場と商業を重ねたというのは、今の工場と商業ではなく、当時の工場と商業のかなり小さいサイズであって､住居にも近いし、一つのユニットの中に収まるようにも感じる。逆にそこの空いた空き地とかを使っていく、みたいな話になるのかなって思ったのですが・・・。

回答

そうだと思います。

討議［　嘉名准教授　］

堺の都市計画は面白くて、大阪市の都市計画を作成するときに堺をどうするのか、かなり議論になった。結局は大阪の都市計画からは外れた。堺は独自の都市計画を作るべきか、大阪府の都市計画の外周部として考えるべきか議論になって、結果的には大阪独自、堺市独自の都市計画になった。中央環状線とか大泉緑地とか放心上に広がるところは取り入れ、一方で堺のオリジナリティーみたいなものもあるようになった。あなたの研究は堺のオリジナリティーみたいなものをどう見ていこうかってところを重視しているのかなと思いました。都市計画の話はちゃんとみておいた方がいいのではないかと思いました。

回答

ありがとうございます。